

---

# 余乃弥美驟雨の物語 ～悪魔とコイに堕そうになる俺～

雨月

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

余乃弥美驟雨の物語 　　ゝ悪魔とコイに堕そうになる俺ゝ

### 【Nコード】

N 8 6 3 6 C

### 【作者名】

雨月

### 【あらすじ】

俺こと、余乃弥美驟雨<sup>よのやみしゅう</sup>は人以外の者たちがうるつく平和な？この世界においてリッチな生活を目指している。そうなるにはやっぱりなんでもしないとイケないので今日もがんばって生計を立てるために仕事をこなしているのだ！

## （前書き）

思いつきで浮かんだ小説ですが、一気に最後まで書けたのでよかったですと思います。この小説について思ったことがあれば感想、またはメッセージで送ってくれると反応しやすいのでよろしくお願いします。

俺は今、悪魔とコイに堕ちそうになっている。

「だーっ！！しっかり掴め！」

「やってるって！」

彼女は綺麗だ。そして、足だって細い・・・

「いつまで私の足を掴んでるのよ！」

「お前がもとはといえば悪いんだろぅが！」

顔を上げればパンツだって見る事ができそうなのこの状況・・・

「き、来たぞ！奴が顔を出した！」

「マジ！？って、何！あの大きさは！？」

「この状況じゃ捕獲も何もできねえぞ！」

この状況、少し前にさかのぼる。

俺の名前は余乃弥美驟雨<sup>ホノミシメウ</sup>。

人類とそうでないものたちが平和に暮らしているといえは聞こえがいいのだが、裏ではさまざまなことが起こっている。そういうのを解決するのが俺の仕事なのだが、今回は簡単だと思って手を出した。無論、そういうのを職業としている連中は結構いるのだが、俺の場合はどうやら貧乏くじを引いてしまったようだ。

「裏井戸に鯉を落としてしまって・・・捕獲してくれんか？夜に外を出歩くと危険だからのう・・・」

そういわれて俺はこのこ夜に裏の井戸に行ったのだ。そこいらを歩いていた悪魔に事情を説明して報酬半分個と言うことで協力を得たのだが……

「のわっ！何をするんだ！」

「へっへっへ！契約も結んでない悪魔を信用するとは愚かねえ！」

俺はその悪魔に突き落とされたのだった……だが、

「くそお！道連れじゃあ！」  
がしっ！

「なっ……」

井戸ぎりぎりにいた悪魔の足を掴んでそのまま井戸に落ちる……しかし、悪魔のほうは運よく井戸の端を掴むことに成功したらしい。それから数十分経って今の状況に至っている。

「ぜ、絶対に離すなよ？落ちたらあのコイに食われる！」

「誰が……離すもんかあ！つて、あんたが落ちればいいんでしょ！」

「元はといえばお前が俺を突き落とすからこんな状況になってるの！」

「顔を上げるな！パンツを見るな！」

「てめえもきちんと片手で掴んでないで両手で端をつかめや！助かったらきちんと謝ってやるからよ！」

ざぱーん！

井戸が深くて助かったといえよう……下のほうではめっちゃくちやでかいコイが口を上のほうにしてパクパクしている。しかしまあ、なんであんなに大きくなってるんだ？聞いた話じゃもっと小さいはずだったと思うのだが……

「何かいい方法はないの？」

俺は悪魔の動く尻尾をじっと見ていて急に頭に電流が走ったようになった。

「……ある」

「どんな？」

「・・・男の肉はおいしくないだろうから・・・」

悪魔の足を掴んだまま、井戸の壁に足をつけてそのまま上に上がる。そして、自分だけ取り合えず井戸から這い上がると・・・

「・・・お前を落とす。残念ながら俺は悪魔とコイに堕ちるほど落ちぶれちゃいないんでね」

必死に掴んでいた悪魔の手をはずしてそのまま落とす。

「ひ、卑怯者！！」

そういいながら悪魔は堕ちていった。さようなら、一時の恋人よ・・・人は他人を蹴落として上に上がっていくものだ。まあ、もっとも・・・

ばくっ！

悪魔は見事コイに飲まれたようだった。

「よっしゃ、ヒット！後はお前の日ごろの行いがいいことを信じてるよ！」

もって来ていた特殊な紐を思いっきり引っ張る。

「ふによぉー根性！根性！」

俺の力がどのくらいかわからんが、とりあえず紐はだんだん上に上がってきて・・・

「せりやああー！！」

コイがそのままお月様にその姿をくつきりと残すと近くの池に着弾。思いっきり引っ張った紐はそのまま俺に直撃・・・

「ぐはっ！！」

「きゃああー！」

どうやらこの悪魔の日ごろの行いはよかったようで、飲み込まれてはいたものの、どこにも怪我はしていなかったようだ。

「あいたたた・・・」

「あゝよかった、何とかこれで報酬はもらえるぜ おじいさん、俺、貴方のコイをつかまえましたよ」

お尻をさすっている悪魔を置いたまま、俺は依頼主であるおじい

さんの元へと向かったのであった。

「・・・おじいさん、これ・・・なんででしょう？」

「これかあ？これはなあ、先祖代々我が家に封印されていた刀じゃあ・・・ちなみに、掴んだらお前さんが死ぬまでつきまとわれるぞあ・・・」

「お、おじいさん！俺、掴んじやっただんですけど！刀ってどんな感じかなって思ってた掴んじやっただんですけど！」

「何？この若者が気に入った？ほっほっほ、元気のいい若者はわたしも好きじゃあ、お前さん、話がわかるいい奴じゃなのう・・・」

「じいさん！誰と話してるの？え、何刀に視線を送ってるの？こ、こんなのいやああああ！！！」

「ねー報酬もらったんでしょ？約束どおり私に半分ちょうだいよ！」

「・・・すまん、それが色々あって半分個しようにも出来なくなっただ・・・」

「なんでよ！その刀なんでしょ？」

「・・・そうだよ、そうなんだ！そんなに欲しいなら、この刀を上げよう。何、すぐに売ってくれば来ればいいからね　大丈夫、きちんと君にも所有権は半分あるから・・・いや、打ったお金は君が全額もらって構わないよ」

「え、マジ？うれしい！」

思ったとおり、自分では取れなかった刀は悪魔が掴むことで簡単に取れた。そして、駆けていった悪魔をよそに、俺はその場から一刻も早く逃げ出したのだった。所有権はあっちの悪魔にもあるので今頃ひつついて取れなくなっているに違いない。くくく・・・いいざまだな！

「それ、逃げろ」

「まてーい！これ、とれないじゃないの！どうなってるの、これ？」  
「俺のせいじゃなーい！！！」

悪魔をまくのにお金を何枚かまかなくてはいけなくなったことが俺の一生でもっとも恥じるべき行為だったと日記に書いてしまった俺だった。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8636c/>

---

余乃弥美驟雨の物語 ～悪魔とコイに堕そうになる俺～

2010年10月8日15時28分発行